

地域を超えてチャレンジする  
みやぎ・やまがた・ふくしま  
女性の交流会  
(第13回みやぎ・やまがた女性交流会)

第1部 パネルディスカッション

テーマ：「今こそ広げよう！地域をつなぐ、  
世代をつなぐ真のネットワーク」

パネリスト

伊藤真知子氏

(東北公益文科大学教授／山形県鶴岡市)

井上 弓子氏

(高島電機株式会社代表取締役会長／  
山形県山形市)

コーディネーター

南條 成子氏

(フリーライター・エディター／  
宮城県仙台市)

《概要》

男女共同参画、女性活躍推進と女性の進出が促進され、社会の意識も大きく変わっています。本来、さまざまな場面で女性も男性も参画し、それぞれの考えを反映させることは、社会の活性化に欠かせません。また、地域や世代を超えた交流は、さまざまな情報交換によって新しい気づき・結果を生み出すのではないかと思います。そこで今回は、若い世代の高校生や大学生、男子学生の方にも参加していただき、『今こそ広げよう！地域をつなぐ、世代をつなぐ真のネットワーク』をテーマにパネルディスカッションを行いました。

●経歴

伊藤さんは東京出身で、大学で社会学を学び、卒業後は横浜の地域福祉センターに勤務。その後、職場結婚し、夫がお寺の跡継ぎだったため退職して専業主婦になり10年間、3人の子どもの子育てをしました。しかし、下の子が幼稚園に入り、「子どもは成長して親の元を離れていく。では、私は何をするんだろう」と思ったとき、「もう一度学びたい」と大学院に社会人入学します。そこで改めて社会学・女性学を学び、国立女性教育会館研究員などを経て、2001年、東北公益文科大学の開学と同時に助教授に就任（現在、教授）。

山形県男女共同参画審議会会長をはじめ、女性リーダー養成などの講師を務めています。

井上さんは山形出身で、高校2年のときに高島電機の社長だった父が他界。その3カ月後に跡継ぎとなる弟も亡くなり、母が会社を引き継ぎました。東京の大学に進学し、結婚後は横浜で専業主婦として3人の子育てをしますが、次女が突然、原因不明の脳症になり、6年後に亡くなってしまいます。その経験から「難病の子ども・障害のある子どもの親の会」を立ち上げ、代表世話人として活動。一方、母が病気になり、会社の役員たちからの「帰れコール」で、50歳のときに高島電機の取締役に就任（現在、代表取締役会長）。21年間、横浜から山形へ“逆単身赴任”し、山形商工会議所副会頭をはじめ幅広く活躍しています。

南條さんは仙台生まれで、グラフィックデザインに興味を持ち、女子美術短期大学へ進学。卒業後は文具メーカーでグラフィックデザイナーとして働いた後、エディトリアルデザインがやりたいと出版社に転職します。そこで中小企業向けの経営雑誌のレイアウト・編集に携わり、取材や原稿執筆も行うように。その後、産業用冷凍機メーカーの広報室に勤務し、同社の子会社に出向して代表取締役になりました。しかし、仙台で一人暮らしをしていた母が病気になり帰郷。現在は、出版社での経験を生かしてフリーライター・エディターとして雑誌の記事執筆、広報誌などの編集、文章指導講師などを行っています。

●ネットワークづくり

伊藤さんは大学院を修了後、慶応大の湘南藤沢キャンパスで3年ほどリサーチ・アシスタントの仕事をしていました。東北公益文科大学は、慶応大との協定のもとに知的な支援を受けてできた大学で、この縁で初代の小松学長と繋がり、開学とともに教員に。その後、大学を中心に山形県男女共同参画審議会、女性リーダー育成の「チェリア塾」などを通してネットワークが広がっていったといいます。しかし、伊藤さんは「意識的にネットワークをつくったというより、そのときそのときにやっていくことがネットワークに繋がり、後の人間関係に繋がっていくのではないかな。リアルで顔を合わせ、直接会って話すと、その後はメールなどを使ってネットワークを繋い

でいきやすいと思う」と話しました。

井上さんは、難病の子どもたちの親の会を立ち上げた際、「ネットワークやグループは、誰か一人強い人がいるとダメで、共感できる場であればならないと感じた」と経験を紹介。新聞記事を見て親の会の連絡会に1本の電話をかけ、参加したことで世界が広がったことから、「ネットワークを広げようというときには、一つのきっかけを自分からとりに行かないとダメだと思う」と語りました。また「みやぎ・やまがた女性機構」のメンバーは、仙台、山形の各地に住み、それぞれ仕事をしているため、連絡はメールのやりとりで「これもネット社会ならでは」と話し、「今、皆さんが情報を探しているので、ネットワークづくりには情報を発信することが大事」とアドバイスしました。

南條さんは、会社勤めをしていた20代の頃、自分の仕事とは異なるビジネス系の勉強会に参加し、意識的に会社とは別の場所で刺激を受け、自分で考えるようにしていたとのこと。「自分が興味を持ったところには、まず行ってみる。興味を持った人と会ってみるといいと思う」と語り、「それが細い線となって繋がり、仕事にも結構プラスになっている」と話しました。また、ネットワークの基本となる人間関係の中では、「周りに、自分の間違いを指摘してくれる人がいるのは有り難いこと。ただ、相手の意見をよく聞くことは大事だが、そのまま受け入れるのではなく、その意見を参考に、取り入れるかどうか、自分にとってはどうかを考えることが大事だと思う」と持論を紹介しました。

### ●地域・世代をつなぐネットワーク

井上さんは、仕事に関わることに限らず、「家族の中でも自分がネットワークの要になっていて、メールやLINEを活用して、夫、息子、娘と連絡をとりあっている」と話し、若い方たちへ「家族の絆は、生きていく中で一番土台となる大事な絆でネットワーク。これから他県の大学に行ったり就職したりした場合でも、親はとてども子どものことが心配なので、ぜひ親御さんに連絡してください」とメッセージを贈りました。

南條さんは、東京で会社勤めをしていて帰省していた頃、「考え方や気持ちは違っても、親とは話をした。家族とは話をすることが大切」と当時を振り返りました。また、「中学

や高校のときの友だちとも縁を切らないでいることが大事だと思う。仙台に戻ってフリーライターになったとき、それほど親しく付き合っていたわけではなかった高校の部活の後輩が声をかけてくれて、雑誌の仕事に繋がった」と話しました。

伊藤さんは、「人生にはいろいろな繋がりがあるが、経験としてムダなことは何もなく、経験したことがみんな生きてるので、やってみたいことは、どんどんやってみたらいい。やろうかな、どうしようかなと思ったことは、やってみる。やらないで後悔するより、やってみる。自分から動くことが大事で、それがまた次の行動や次のネットワークに繋がる。若い皆さんに期待したい」と、若い方たちにアドバイスしました。

### ●質疑

会場から、「人生のステージや仕事が変わると付き合う人が変わり、以前の関係性が維持できず、ネットワークが保てない。そうしたとき、どう対処したか」という質問があり、井上さんは「今の自分の立ち位置や仕事の人間関係が第一になり、価値観も違ってくるが、今、無理矢理繋がらなくても、また将来、繋がることもあるのでは」、南條さんは「若い頃は、専業主婦の人とは話が合わないと思っていたが、話をしてみると専業主婦をやっている人のほうが地域との繋がりをつくっている。自然に任せるのがいいのではないか」という答えでした。

続いて、「年齢や女性だということで、男性社会の中で年の離れた方とのコミュニケーションがうまくとれない。どういうことを心がけたらいいか」という質問には、伊藤さんが「女性だからと発言しないでいると、男性の意見でまとまってしまう。言うべきところは、しっかり言っていく。その上で、受け流したり、受け止めたり、使い分けながらやってきた」、井上さんは「普通、会合の場合はほとんどが男性、女性はごくわずかで、まだまだ男性社会。また若い方たちは世代間の差、年配の人とは相当ギャップを感じると思うが、価値観や生きてきた世界も違うので、その違いを言うより、うまくお付き合いをしていく。ただ、自分の考えと余りに開きがあれば、主張は主張として伝えるべき。そうでないと社会が回っていかない」と答えました。